
気が付いたら、攻略されそうです・・・～西村舞編～

零堵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気が付いたら、攻略されそうです・・・西村舞編

【Nコード】

N6647Z

【作者名】

零堵

【あらすじ】

目が覚めると、俺は女の子になっていたしかも、なんか見た事あるな・・・と、思っていたらゲームのキャラになっていた。しかもメインヒロインとなっていた。

このままどうなるのか？全く解らなかったが、とりあえず

「主人公とのラブイベントを回避」と言う方針で動く事に決める。

そんな、性転換した彼女の物語

気が付いたら、攻略されそうです・・・の番外編みたいな感じだと思っています。

↳プロローグ↳（前書き）

零堵です。

投稿します。

くプロローグく

気がつくと、そこは見知らぬ天井だった。

「あれ・・・ここは・・・って、声が!？」

自分の声を聞いて、驚く。

何故なら、女の声だったからで、少なくとも男の声ではなかった。慌てて体を確認してみると、大きい胸をしていて、これでもう自分が、男では無く

女になったんだと、実感してしまった。

「何でこんな事に・・・？確か、俺は、家でゲームをしていたのに」

どうしてこうなったのかよく、思い出してみる。

家でゲームをしていて、気がついたら、この場所にいたのであった。あまりの突然の事で、パニックになったが、冷静に考えてま、なっちゃた物はしょうがないか・・・諦める事にした。ところで、一体誰になったんだ？と思い、鏡を探してみる。

部屋の中には鏡は無く、あるのは、勉強机とベット、それに箆筥ぐらいだった。

これじゃあ、自分が誰になったのか、全く解らなかったので、部屋の外に出てみる。

廊下はちよつと広く、なんか見覚えがある光景だった。

鏡がある部屋を見つけたので、そこで自分の姿を見てみて、驚いた。

「え・・・西村舞!？」

そう、俺の姿は、西村舞となっていたのである。

しかも既に、制服の姿になっていた。ちなみに西村舞と言うのはゲーム「ラブチュチュ」のメインヒロインである

幼馴染の初崎孝之と隣同士の家で、よく孝之の事を起こしに行く、ギャルゲーとかに出てくる

よくあるヒロインなのであった。

「という事は・・・ここは、ラブチュチュの世界なのか!？」

そう言ったら、俺に声をかけて来る者がいた。

「舞、どうしたのよ？」

赤い髪をして、ショートカット姿で、舞の顔に少し似ている人物だった。

と言う事は・・・この人が、西村舞の母親

西村恵子さんだと思う。

「い、いや、何でもないよ」

「そう?それより、孝之君、まだ寝てると思うから、起こしに行くんじゃないの?毎朝、そうしてたじゃない?」

「あ、う、うん、じゃあ、行つて来る・・・」

ここで、いつもと違った行動をすると怪しまれるので、外に出る事にした。

外に出て、隣の家に向かい、ゲームと同じ台詞を言う。

「孝之!起きなさい!朝だよ」

そう言ってから、数分後

「舞、そんな大きな声で言うなよ、恥ずかしいだろ!？」

そう言つて出て来たのは、主人公の初崎孝之だった。

改めてみると、結構なさわやか青年って感じがして、なかなかの美形だったりした。

こいつが、色んな女の子と付き合う可能性がある奴か

なんかむかつくな?このリア充め!

そう思っていると

「舞、学校だと言うのに、手ぶらで来たのか?鞆忘れてるぞ?」

「あ、確かに・・・ちよつと持つてくるよ、先行つてて」

「いや、待つてる」

何でだ?と思つたが、まあ深く考えない事にして、自分の家に戻り

鞆を持ち出して、外に出る。

そして、主人公と一緒に登校する事になった。

登校途中

「そろそろ夏だよな」

「な、夏？」

「夏だよ、明日から七月じゃねーか」

「そ、そうなんだ」

「どうした？舞？なんか変だぞ？」

「い、いや、大丈夫よ、気にしないで」

「そうか？」

と言う事は、今日は六月三十一日で、明日から七月に突入って事なのか・・・

確か、ゲーム「ラブチュチュ」だと、七月八日で、ゲームが終了した筈なので

これからどうするか・・・考えて、結論はと言うと

「主人公とのラブイベントを回避」すると言う方針で動こうと思った。

この先何が待ち受けているのか、全く解らなかったが

何とかやっていくか・・・と思い、学校へと向かったのである・・・

ゝプロローグゝ（後書き）

気が付いたら、攻略されそうです・・・のキャラ変更編です。

まあ、番外編？みたいな感じかもしれません。

この物語は、暇ができれば、投稿したいと思います。

く第一話く一日目く学校潜入く（前書き）

はい、零堵です。

続きの話です。

〈第一話〉一日目〈学校潜入〉

主人公の初崎孝之と歩いて、辿り着いた場所は

「私立白稜高校」と書かれていた。

うん、ゲームとまったく同じ名前の学校なんだな・・・

と言う事は、この世界は、ラブチュチュの中の世界なのか？とか思ってしまった。

「どうした？舞？」

「うつん、何でもないよ」

「そうか？ま、いいけど」

そう言つて、主人公はスタスタと校舎の中に入っていく。

俺も、中に入り、自分の上履きを探して、何とか見つけて、それに履き替えて

自分のクラスを探す事にした。

ゲームどおりなら・・・と思い、二年二組の教室の中に入る。

教室の中に入っても、誰も驚かないので、やっぱりここで合ってるんだな・・・と実感し

ゲームと同じ席に座る。

隣に主人公の孝之がいて、窓際にもう一人の攻略対象キャラの沖島ユウが座っていた。

沖島ユウがいるって事は、やっぱりここはラブチュチュの世界なのか・・・

ま、来ちゃったものはしょうがないとして、何とかなるだろう・・・と思う事にした。

そして、キーンコーンとチャイムが鳴り、先生が入ってくる。

先生は男の先生で、声を聞くと、やっぱりゲームに登場した先生の声と全く同じだった。

授業内容は一体どんなんだ？と思い、とりあえずまじめに聞いてみると

元いた世界と全くと言っていいほど、変わってはいなく

普通に問題が解つたりしたので、何とかなった。

時間が過ぎていき、お昼になった。

お昼は、どうしようか・・・と悩んで

この世界だと、学校に学食があるので、そこに行く事にした。

学食に行こうとすると

「あれ？舞、今日は弁当じゃないのか？」

孝之が話しかけてきた。

そうか、確か、舞は毎日弁当を作って、教室で食べてたな？そういえば・・・

「ちよっと、寝坊しちゃって、用意してないの」

「何言つてんだよ、俺の事、朝、迎えに来たじゃないか？少なくとも、作る時間はあつたはずだぜ？」

「でも、作るの忘れたの、だから学食行くのよ、何か文句でも？」

「いや・・・ただ、いつもと違うなって思っただけだよ、俺も学食行こうかな・・・」

そんな事を言つてたので、ほっとく事に決めて、学食に向かう事にした。

学食に着くと、人がたくさんいて、券売機の前に並んでいる。

俺もその列に並んで数分後、俺の番になり、何にしようか悩んで、きつねうどんを押した。

お金を入れる投入口がないので、無料って事には驚いたが、深く考えない事にした。

きつねうどんの食券をカウンターに置くと、すぐにきつねうどんが出てくる。

空いている席を見つけたので、そこに座って食べる事にした。

移動してて思つたのだが、胸が大きいから、歩くのに少ししんどかった。

とりあえず思つたのは、自分が女になるんだつたら貧乳、見るんだつたら巨乳だな・・・と思つたのである。

きつねうどんを食べ終わって、教室に戻り

これからの事を考える。

この体、西村舞になったと言う事は、主人公とのラブイベントはあるわけだから

それを回避するには・・・と、考える。

とりあえず誘われたら、断ると言う方針で動こうと決めて
午後の授業に専念する事に決めたのであった・・・

く第二話く一日目く学校潜入く（後書き）

こっちの物語も投稿します。

お気づきかと思いますが、「気が付いたら、攻略されそうです・・・」

「と違う所がひとつだけあるのを解りますか？」

そう、違うのは、日付なんです。

あっちでは、七月一日が月曜日となっていました

こっちでは、七月一日は火曜日となっております。

よく確認してみると、解りますよ」

これからも、この物語をよろしく願います。

く第二話く一日目く午後く部活動く（前書き）

はい、零堵です。
続きの話です。

く第二話く一日目く午後、部活動く

午後の授業も普通に終わった。

授業が終わったので、どうしようかと思ったが、確か

西村舞は、部活動に入っているので、部活動に参加する事に決めて教室を出る。

西村舞の入っている部活は、陸上部なので、グラウンドに向かった。グラウンドに向かうと、ジャージを着てホイッスルを首に掲げているいかにも

体育教師らしき人がいて、ジャージのネームプレートに「山本」と書かれてあった。

「西村、まだ、着替えてなかったの？部室で着替えなさい」

「えーっと・・・部室って・・・」

「忘れたの？あそこよ？」

そう言つて、プレハブ小屋を指差す。

「あ、はい、あそこですね、じゃあ、着替えてきます」

そう言つて、俺は、プレハブ小屋の中に入る事にした。

中に入ると、他の人が着替えていたりしている。

これって、男だったら天国な光景なのではないだろうか？

まあ、俺は女になってしまったので、ちょっと残念な感じがしてしまった。

空いているロッカーを探していると、西村と書かれたのを見つけたので、そこを使う事にした

ロッカーの中に入っていたのは、青色のジャージとズボンだった。

うん、ブルマ姿では走らないのか・・・

まあ、ゲームの中でもブルマ姿は見た事がなかったから・・・

俺は、着てる制服を脱いで、ジャージに履き替える。

うん、胸が大きいから着にくかったが、なんとか着れた。

ジャージに着替え終わって、プレハブ小屋から出て

先生らしき人に指示された通りに、並ぶ事にした

「じゃあ、今日は、百メートルのタイムを測るわ、皆、準備して」
そう言つて、走る準備をしているので、俺も準備する事にした
他の人のタイムを見てみると、速い人がいたり、遅い人がいたり、
結構まばらだった。

「はい、次、西村」

「あ、はい！」

俺も、スタート位置に並ぶ。

山本先生が、ホイッスルを口にくわえて、こう言つた

「よい、スタート！」

そう言つたので、俺は走り出す。

走り出して思つたのだが、胸が大きいので、走りにくく、バランス
が悪いので

転びそうになりながら、なんとか完走する事に成功した。

先生が、タイムを見て、こう言つてくる。

「西村、前よりタイムが落ちてるわ、この調子だと県大会には出せ
そうにないわよ？頑張りなさい」

「は、はあ・・・」

別に、頑張りたくはないんだが・・・

そんな感じに部活をやつて、夕方になった。

夕方になって、先生がこう言つ。

「はい、今日の部活はここまで、各自体を十分に休めるように、で
は、解散！」

そう言つたので、俺は、帰る事に決めて、プレハブ小屋の中に入り
制服に着替えて、外に出る

外に出ると、もう日が沈んでいて、結構真っ暗になっていた。

寄り道しないで、俺はと言つと

真っ直ぐ、帰る事にしたのであつた・・・

く第二話く一日目く午後、部活動く（後書き）

こっちの物語も、投稿します。

これも書いていて、ちよつと楽しいかも・・・って感じですかね？
これから、よろしくお願いします。

く第三話く一日目く夜、西村家にてく（前書き）

はい、零堵です。
続きの話です。

第三話　一日目　夜、西村家にて

俺は、家に戻る事に決めたので、家に戻る。

西村家に戻った俺は、家の中に入った。

家に戻ると、母親の西村恵子さんがこう言ってきた。

「舞、お帰りなさい」

「ただいま、お母さん」

「もうすぐ、夕食が出来るから着替えて来なさい」

「はい」

そう言つて、俺は、西村舞の部屋に行く。

部屋の中に入り、早速服を脱ぐ事にした。

着てる制服とスカートを脱いで、下着姿になった。

下着の色は、赤色で統一されていて、上下とも同じ色だった。

うん・・・この姿を見て実感してしまうのは、結構なポリウームのある胸だという事だった。

一体何を食ったら、こんなにでかくなるんだ？と男だった俺には、こんなの経験した事はなかったたので、興味本位で触ってみる事にした。

「・・・・ん・・・・あ・・・・」

形は、お椀形をしていて、触り心地は結構良く、なんか揉んでいて、ちよつと変な気分になってきた。

触っていて、声がつい出てしまった。

乳首が下着姿でも解るぐらいにツンと張ったので、もしかして・・・感じてるのか・・・と実感してしまった。

いつまでも揉んでいるのも何なんで、箆笥から服を取り出して着る事に決めて、箆笥を開ける。

中に入っていたのは、下着と色違いのスカートと夏物の服だと思われる洋服が入っていた。

男物の服が全くなかったたので、仕方がないので、水色のポロシャツ

と赤いスカートを履く事にした。

スカートを履くのに、少し手こずったが、なんとか着る事に成功し、部屋を出る。

部屋に出ると、渋い感じの男の人が、俺の姿を見て、こう言ってきた。

「舞、見慣れない服装だな？いつもは、かわいい感じにしてるのに」
多分、この人がゲームの中でも登場した、西村舞の父親、西村新三郎だと思われる

ゲームの中でも「お父さん」と言っていたので、俺もそのままその言葉で、話しかける事にした。

「たまには、いいかな・・・と思って、変かな？お父さん」

「いや、変じゃないが・・・まあ、似合ってるぞ、さすが私の娘だな」

そう言つて、おでこにキスしてきたので、ちょっと驚いてしまった。
何だ？このフレンドリーな父親は・・・ま、まあ悪い人には見えなかったたので、この家族は友好関係が非常にいいんだろう・・・と、納得する事に決めたのであった。

「あなたゝ舞？夕食出来たわよ」

そう、言ってきたので、夕食を父親と取る事にした。

夕食に出されたメニューは、豚カツ定食みたいな感じだった。

「いただきます」

「いただきます」

そう言つて、夕食を食べる。

うん・・・何というか、美味い。ご飯何杯も行けちゃう感じなのだが、すぐにお腹いっぱいになった。

この体は、そんなに大量には入らないらしい。実に便利な体だな・・・とか、思う。

「ごちそうさま」

「お粗末さまでした、あ、舞、これからどうするの？お風呂？それとも寝る？」

「うん・・・自分の部屋で、ちょっと勉強してるよ」

「解ったわ、夜中まで起きてちゃ駄目よ？」

「はい」

そう言つて、俺は、自分の部屋に戻り、鞆からノートを取り出して、こう記す事にした。

「今日、どう言う訳か男だった俺が、西村舞の体の中に入ってます、原因は不明、もどり方も不明、出来れば戻りたいのだが、その方法も不明・・・しかも、この世界はゲームの「ラブチュチュ」と非常に似ている。これからどうするかだが・・・このまま行くと、西村舞のイベントが起こるはずであるので、それを俺は、これから体験するのだろう、どういった展開になるのかは、不明だが、何とかやってみようとここに記す・・・うん、まあ、こんな感じでいいか・・・」

そう言つて、時刻を確認してみると、結構遅い時間だった。

とりあえず、明日の予定表を見て、教科書やノートを鞆の中に入れて、ベットに潜る。

この西村舞は、毎朝主人公を起こしに行つてるので

明日も早めに起きなきゃいけないのか？と思い

ベットの近くにあるタイマーを朝早くに設定して、目を瞑る。

こうして、今日の一日が終わったのであった・・・

く第三話く一日目く夜、西村家にてく（後書き）

零堵です。

こつちの物語も投稿しますく
この物語を、よろしくです。

く第四話く二日目く朝く（前書き）

はい、零堵です。
続きの話です。

く第四話く二日目く朝く

ジリリリリと音がしたので、目が覚める。

目を開けて見えたのは、女の子の部屋だった。

元の男の姿に戻ってはいなく、鏡がないので自分の姿を確認は出来なかったが

胸が大きいので、確実に女だと思われるので、西村舞だと思う。

戻ってないのか・・・と、落胆したが、気を取り直して、時刻と日付を確認する事にした。

時刻は、朝の六時になっていて、カレンダーで確認してみると

七月一日の火曜日となっていた。

それを確認してから、部屋を出る。

部屋を出て、向かった先はキッチンだった。

キッチンで、この西村舞と言うキャラは、毎朝自分でお弁当を作っているのだ。

俺もそう実行する事にしたのだった。

調理方法は、体が覚えているのか、難なくこなして、あつという間にお弁当が出来る。

味見をして見ると、結構美味く、西村舞って料理上手なんだと実感してしまった。

おまけに胸も少なくともC以上はあるので、男にモテモテな感じがする体じゃないか？とか

思ってしまった、そんな事を考えるのをやめて、お弁当を包んでいると

「おはよう、舞、今日も早いわね」

そう言っ来たのは、ショートカットの髪をしている、舞の母親西村恵子であった。

「あ、お母さん、おはよう」

「お早う、舞、私、これから朝食作るから、舞も手伝う？」

「うん」

俺は、そう言つて、二人で、朝食を作る。

恵子さんも、手際がよく、あつと言う間に作ってしまった。

「お父さんは、まだ寝てるから、起きないから二人で食べましょう」

「はい、頂きます」

「頂きます」

そう言つて、二人で朝食を食べる。

うん、見た目もいいし、何より味が良かったので、直ぐに食べ終わってしまった。

食べ終わると、恵子さんがこう言つて来る。

「舞、今日も孝之君の事、起こしにいくんでしょう？」

「う、うん、今から行くよ」

ここで断るのも怪しまれるので、俺はOKして、自分の部屋に戻る。部屋に戻つて、服を脱ぎ、私立白稜高校の制服を着る事にした。

二回目なので、時間はかかったが

着る事に成功し、鞆を持つて、外に出て、隣の家に行く。

インターホンを鳴らすと、主人公の母親らしき人が出てきた。

うん、この人美人だなゝって、見とれていると、彼女がこう言つて来た。

「舞ちゃん、おはよう、今日も起こしに来てくれたのね？さ、あがつて」

「あ、はい、お邪魔します、おばさん」

「おばさんじゃないでしょ？私の事は、お母さんと呼びなさい？」

「は、はあ・・・お母さん」

何で、お母さんと呼べって言ってるんだ？と疑問に思ったが、その自称お母さんに案内されて

主人公、初崎孝之の部屋にたどり着く。

孝之の部屋に入り、見てみると、布団をかぶつて寝ている孝之を見つけたので、早速起こす事にした。

「孝之！朝よ！おきなさい！」

そう言つて見たが、全く反応がなかった。

よし、じゃあこうなつたら・・・攻撃を加えて起こしてみるか・・・
と思い、実行した。

「孝之、朝だよ～～！えい！」

原に思いつきり肘打ちを食らわせてみると、「ぐふ！」と叫んで、
布団から飛び起きる。

「いきなり何するんだ！・・・って、舞か！？今の！」

「そうよ、孝之が起きないから悪いんじゃない、朝よ？学校遅刻し
ちゃうでしょ？」

「頼むから普通に起こしてくれよ・・・」

「じゃあ、私、外で待ってるから、着替えて早く来なさいよね？」

「あ、おい・・・たたく、解ったよ」

そう言つて、俺は孝之の部屋を出る。

そして外に出て、待っていると、制服を着た孝之が出てきた。

「よし、行くぞ、舞」

「ええ」

そう言つて、二人で学校に向かう事になったのであった。

通学途中に思った事は、攻撃を加えて起こすのってちょっと癖にな
りそうだな・・・とか

思っていたのである・・・

く第四話く二日目く朝く（後書き）

タイトル名変更しました。

この物語も、よろしくお願いします。

く第五話く二日目く昼く沖島ユウとの会話く（前書き）

はう、零堵です。
続きの話です。

〈第五話〉二日目〈昼、沖島ユウとの会話〉

主人公の孝之と二人で登校し、私立白陵高校にたどり着いた。

俺は、主人公と同じクラスで、席も隣同士なので、迷う事は無く自分のクラスの中に入り、自分の席に座る。

座ってから、鞆を置いて、ノートや教科書を机に入れてると

「あ、そうだ、舞？」

「何よ」

孝之が、話しかけてきた。

「映画見に行かないか？」

「映画？」

「ほら、最近、舞と行ってないだろ？だから、行こうと思って、今日とかどうだ？」

「そうね・・・」

俺は、考える。

最近と言うことは、前にも二人つきりで行った事があるというのか？羨ましい奴め！と思ったが、この世界での映画って、一体何をやってるのか

物凄いい気になった。二人で行くのも癪だが、俺はこう言う。

「判ったわよ、部活終わったらでいい？」

「ああ、構わないぞ、俺、教室で待つてるな」

こうして、映画に行く約束が出来たのであった。

そう話していると、キンコーンと鳴って、先生がやって来る。

そして、授業が始まり、一体どんな授業をやるんだ・・・？と気になったが

男だった頃の世界とほとんど変わっていきなく、これなら問題ないな・・・と、思ったので

真面目に聞く事にした。

そして、時間が過ぎて、お昼になった。

昼は、お弁当を用意してあるので、今日は学食に行く事はしなかった。

教室内で、お弁当箱を取り出して、開けてみる。
中に入っていたのは、卵焼きやウィンナーやおにぎりが入っていて子供に人気がありそうな、ありきたりなメニューだった。

まあ、自分で作ったんだし、別に文句はないよな・・・と思い、食べる。

うん、料理上手と言うゲームの設定のおかげか、結構美味しい。
教室内で、弁当を食べていると

「あ、西嶋さんも弁当なんだ？」

俺に、話しかけてきたのは、ゲーム「ラブチュチュ」の攻略対象キヤラの一人、沖島ユウだった。

沖島ユウは、男子の制服を着ているが、正真正銘女の子で、男装して、この学校に通っているのである。

まあ、自分から女だって言わない限り、バレナイんじゃないか？と思う。

だって、この西村舞の体と違って、胸が小さいし。

「うん、沖島君は？」

「僕は、学食行こうかなって思ってた・・・」

「あ、じゃあ、私のお弁当、少し分けてあげようか？」

「え、いいの？」

「いいわよ、はい、どうぞ」

そう言って、弁当のオカズを沖島ユウに差し出す。

ユウは、ありがとうと言って、一緒に食べる事にした。

うん、他人から見れば、男女がひとつのお弁当を食べているって光景なのだが

実際には、女同士なんだよな

ユウと一緒に弁当を食べ終わると、ユウがこう言って来る。

「西島さん、お弁当ありがとね？」

「舞でいいよ？私も、ユウって言うていい？」

「あ・・・うん、じゃあ、舞・・・で、いいかな？」

「いいよ？ユウ」

なんか、ユウが少し照れていた。うん、なんだ？ちょっとかわいいぞ？

そう思っていると、教室に孝之が戻ってきた。

孝之は、チャイムが鳴ってから、教室を出て行ったので学食で食べに行ってたんだな？と思われる。

「あれ？ユウ？どうしたんだ？なんか顔、赤くないか？」

「な、なんでもないよ？孝之」

「ええ、何でもないのよ？孝之の気のせいだわ」

「そうか？」

孝之は、不思議な顔をしていたが、ここは黙っておく事にした。

そして、チャイムが鳴ったので、午後の授業に集中する事にしたのであった・・・

く第五話く二日目く昼、沖島ユウとの会話く（後書き）

こっちの物語も、書いてて結構楽しい感じですかね？

別の話に、気が付けば、攻略されそうです・・・も、あります
そっちを読んでから、こっちを見るのもいいですし
こっちから読んで、あっちを見るのもいいかもです。

お気に入りに入れてくださった方、ありがとうございましたく

く第六話く二日目く午後、映画館く（前書き）

はい、零堵です。
続きの話です。

く第六話く二日目く午後、映画館く

午後の授業を普通に、終わって放課後。

俺は、部活に行く事にしたので、校庭へと向かった。

校庭にたどり着いて、陸上部の部屋と思われる、プレハブ小屋の中に入る。

中に入ると、昨日と同じく、ジャージに着替えている生徒が、結構いた。

俺もその中に入って、西村と書かれたロッカーを開き、ジャージに着替える。

着替え終わって、プレハブ小屋から出て、陸上部の顧問と思われる、山本先生がいたので

その近くに、集まる事にした。

山本先生もホイッスルを首に掲げて、ジャージ姿だった。

「はい、今日の練習を始めましょう、今日は、百メートルを三セツトやるわ、皆、位置について」

そう言ったので、俺もスタート位置に並ぶ。

そして、俺の番になったので、俺も走る事にした。

百メートルを三回走った後、山本先生がこう言うてくる。

「西村、前よりは、タイムが少しあがっているわ、この調子で頼むわね」

「あ、はい」

「じゃあ、次はリレー形式で練習よ、それが終わったら、今日の部活は終わりにします」

そう言うて、リレー形式の練習が始まった。

三十分ぐらい、その練習をして、山本先生がこう言う。

「はい、今日の練習は、終わり、また明日、練習するから、体を休めるように、では、解散！」

そう言ったので、プレハブ小屋に行って、制服に着替える。

なんかもう、他人の女性の下着姿を見ても、何も感じなくなっただな・・・と実感

まあ、自分も女になっちゃったし、こんなもんなのか？とも、思ってしまった。

着替え終わり、主人公が教室で待っているというので、自分のクラスに行く

確かに待っていた。でも、寝ていた。

まあ、確かに待ってるって言ってたけど、寝る事はないんじゃないか？と思うのだが・・・

しょうがないから、起こす事に決めた。

「孝之、行くよ？」

そう言ってみる、しかし、起きない、じゃあ、どうやって起こそうか・・・と悩んだ末

とりあえず、殴ってみる事にした。

「孝之・・・えい！」

殴った瞬間、勢いよく目が覚めたのか、俺に向かって、こう言うてくる。

「痛って〜！ま、舞、殴る事はないだろう〜！」

「だって、起きなかったし」

「もつと優しく起こすとかあるだろう？・・・ったく、まあいいが・・・

・・・じゃあ、行くぞ」

「そうだね」

そう言つて、俺と主人公は、教室を出て行き、映画館に行く事にしたのであった。

映画館は学校から歩いて、数十分先の駅の付近にあった。

やっている映画を見ると、「戦いとは非常なり」のアクション物

「あたしと貴方のラーメン日和」と言う恋愛物

「ゾンビって、臭いっす・・・」と言うホラー物だった。

うん、内容がどれも凄い気になるのだが・・・

「舞、どれにする？」

「孝之は、どれが見たいと思ってるの？」

「俺か？そうだな・・・やっぱ、戦いとは非常なりかな、舞は？」

「私は・・・どれもみたいけど、孝之の選んだものでいいわ」

「じゃあ、決まりだな」

そう言つて、戦いとは非常なりを見る事にしたのであつた。

映画館の中は、結構広く、お客さんを満員とはいかないが、結構入つていた。

そして、上映が始まり、集中して見る事した。

ストーリーは、ある男が家族を殺されて、その復讐の為に師匠に弟子入りして、強くなり、復讐者を倒すというストーリーで、ちょっと感動してしまった。

映画を見ていると、手に何か触れる感触があつたので、見て見ると孝之が手を握つてきた。なんでだ？と孝之の方を見たが、こつちを見ないで映画を見ていたので

ま、いいか・・・と、そのままにいる事にした。

映画が終わつて、映画館の外に出て、孝之がこう言ってくる。

「映画、面白かったな？舞は、どう思った？」

「そうね・・・確かに面白かったわ、続きが気になる展開ではあつたけど」

「だよな、中途半端に終わったしな、もうすっかり暗くなつたし、帰るか」

「うん」

確かに、空を見てみると、日が沈んで夜になっていたので、俺は、そう言つて

孝之と一緒に帰る事にした。

家にたどり着くと、孝之がこう言ってくる。

「じゃあ、また明日」

「また、明日」

孝之はそう言つて、隣の家の中に入る。

そっか・・・隣同士だから、会う確率は、物凄く高いんだな・・・と

実感してしまったのであった・・・

ゝ第六話ゝ二日目ゝ午後、映画館ゝ（後書き）

気が付いたら、攻略されそうです・・・

連載終わったのに、アクセス数が百以上って凄いですねえ・・・

こっちの物語も連載しているので、よろしくです。

あと、気が付いたら、魔王の部下になってました・・・も、始めましたゝ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6647z/>

気が付いたら、攻略されそうです・・・～西村舞編～

2011年12月30日18時46分発行